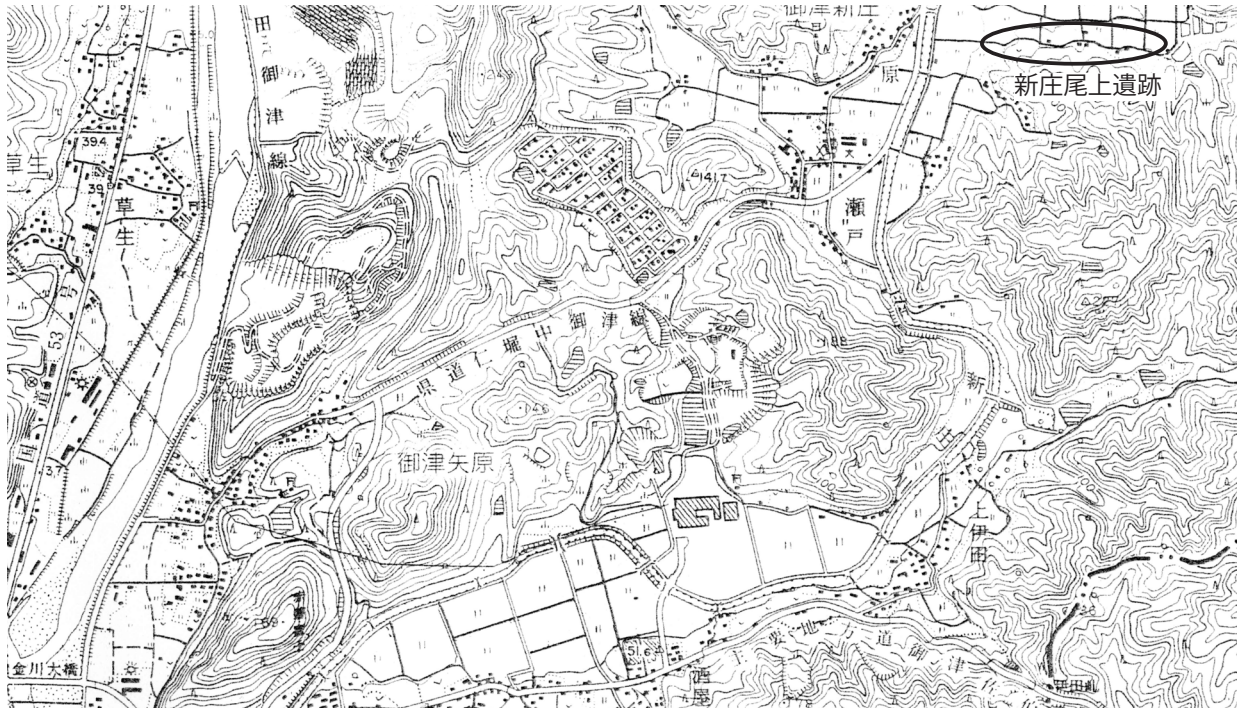


新庄尾上遺跡

寒川 史也

【遺跡の位置】



S=1/25,000

【遺跡の概要】

新庄尾上遺跡は岡山市御津新庄に所在する。五城北地区の岡山県営圃場整備事業に伴い、御津町教育委員会が昭和63(1988)年から平成3(1991)年にかけて発掘調査を実施し、大きく東西に分かれた約16,000㎡の調査区からは、弥生時代中期から後期を中心とした集落遺跡がみつまっている。また、遺跡からは竪穴建物が27棟検出され、小盆地における中心的な集落であったことが考えられる。

新庄尾上遺跡で注目すべきは、弥生時代中期後半の竪穴建物から鳥装人物絵画土器が出土した点である。土器は、壺の頸から肩にあたる縦9.4cm、横10.9cm、厚さ1.0cmの破片で、鳥に扮した人物像が鋭利な工具を用いて描かれている。顔を横向きにし、口に嘴をつけ、頭には太めの浅い線で鶏冠状のものが表現されている。胴は肩から腹部にかけてすぼまり、中央の横線が衣服を縛るための紐であるならば貫頭衣が想像される。両腕は肘を軽く曲げ左右に大きく広げ、開いた掌の指はそれぞれ4本分描かれている。両肩からは下方に直線が描かれ、マント状の衣装を羽織っている表現ともみられる。さらに同様の壺の破片はもう一点あり、高床の掘立柱建物が描かれている。屋根は寄棟風で、内部を沈線で斜格子状に充填し、棟端から外側にのびる1条の弧線は千木を想起させる。床下の柱は建物本体と比べて長く、高層の建物とみられる。

弥生時代の鳥のモチーフは、穀霊を運ぶ動物として描かれる例が多く、農耕儀礼において重要な役割を担ったと考えられる。本例は、鳥装のシャーマン的な性格をもつ人物が、神殿とも捉えられる高い建物の前で執り行った儀礼場面を壺形土器に表現したものと推測できる。弥生時代の祭祀儀礼の一端を知る上で極めて貴重な考古資料であり、岡山市重要文化財(考古資料)に令和4年12月20日付指定されている。

【文献】岡山市教育委員会 2009『新庄尾上遺跡』

【交通】JR津山線「金川」駅下車 徒歩90分

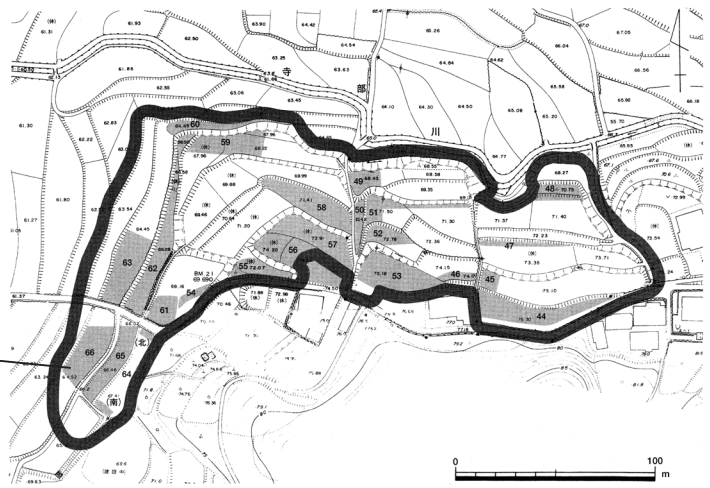
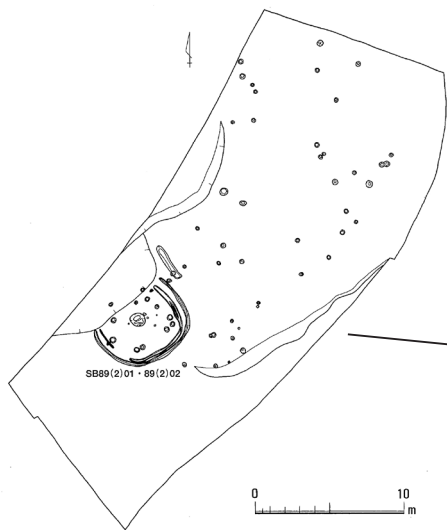


図1 遺跡西側調査範囲と
 絵画土器出土竪穴建物の位置

66トレンチ

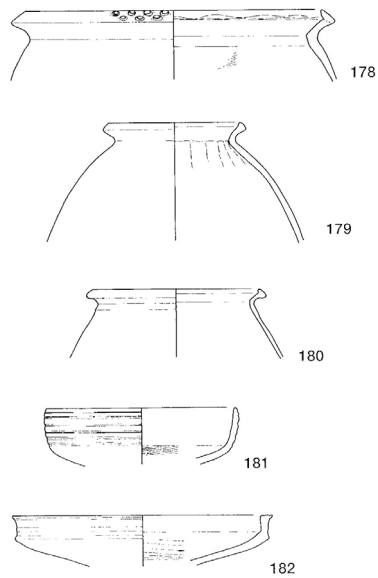
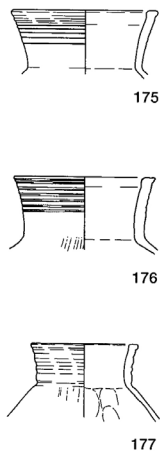
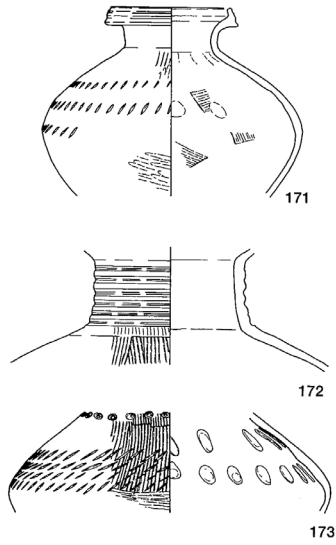


図2 竪穴建物出土土器

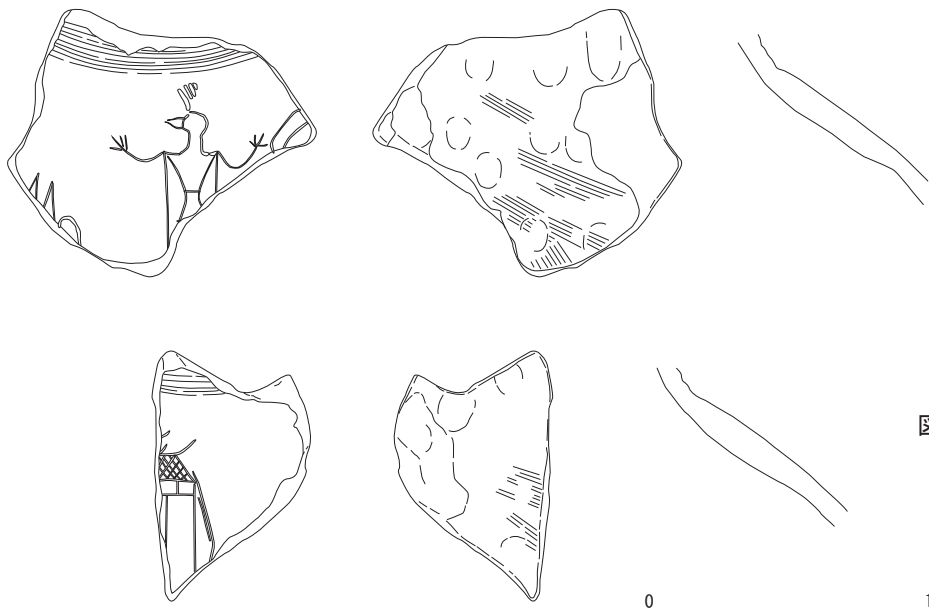
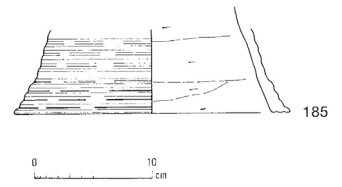


図3 鳥装人物絵画土器

